

## 提言

### アメリカにおける江戸思想史の三十年を顧みて

ヘルマン・オームス

六十歳もなかばになると、だんだん近づいてくる引退、やがてそれが現実となるであろう未来を遠ざけ、自分の視線を向けなおして、過去を凝視しがちになる。私自身は引退へのコーナーを回ったとは必ずしも思っていないが、ときたま過去を回想することをはじめている。その過去とは、徳川ヒストリー、なかならず思想史を教えて私が生き、経験してきた三十年以上の長きにわたるキャリア、そこにおける歴史の視野の展開である。『日本思想史学』に「何かを書け」と依頼された時、このような私の思いの何ほどかを書き留めるよい機会が提供されたと思つた。

簡略にはあれ、このような三十年の期間を超えてそれを提示することは、一つの学問分野の興隆と消滅の始

まりを私が証言することである。一九六八―七二年に私が大学院にいた時に、徳川日本に関する英語文献はどちらかといえば少ない方で、制度史を主にして明治維新へ極端にかたよった構成であった。私たちが読んだ本は、長州、坂本龍馬、幕府官僚制・徳川教育などに関するもの、徳川日本における天皇と国家や水戸学に関する書、そして近代化に関する大分量シリーズの論文のいくつか、そしてベラーの『徳川宗教』（邦訳名『日本近代化と宗教倫理』未来社）であった。七〇年代になると、いくつかの論文あるいは著書の章の内に、理論的アプローチによって徳川思想史という学問分野を確立しようとする試みが姿を現した。この努力のイニシアティブを取ったのはシカゴ大学であった。

八〇年代後半の中ごろには、若干の書物においてイデオロギーという問題が焦点となった。その言葉（イデオロギー）は、徳川初期、水戸学、そして国学を扱った著述のタイトルに見られたが、それだけではなく懷徳堂や新井白石に関する優れた研究や、徳川儒教に関する評論集にも見えていた。これらの著述のかなりのものが翻訳によって日本で親しまれるようになったのは周知のところである<sup>1)</sup>。

イデオロギーが問題となった場合に比定されるものとして社会史があるが、そこで一つのトピックとなったのは農民紛争であった。一九八五―八六の二年間の短い期間の中で、四点もの「一揆」に関する研究が現れた。それ以降はわずかに二点の研究が後続しただけである。それらは、天明の一揆、庄内・福島の一揆を扱い、あるいはこの時期を通じての農民の社会的不満の増大の軌跡をたどった。それは、農民紛争の物語の翻訳書によって追究がなされたものである。プロセミナーで大学院生たちは大変な興味をもってこれらの研究を読んだ（私の知っている限り、これらの著述は殆ど日本語への翻訳がなかった。それは日本における徳川社会史という研究分野が、思想史に比べて非常に大きいという理由によっているのであろう）。

イデオロギーと農民紛争というトピックの双方は、そ

れ自体が他の文化と歴史（中国とヨーロッパ）を比較することに適していたし、そしてまた理論的著述（若干の名前を挙げればフーコーやブルデュー）に関する極めて多彩な議論を持ちこむことも可能にした。そのとき、私を驚かさすような展開が起こった。その驚きはただ一つの理由によっていた。すなわち歴史学という学問は、恰も歴史自身がそうであるように、変革を課題としているし、そしてその変革は研究書の供給によってだけではなく、それを求めることによって引き起こされうるということを、何故か私は忘れてしまっていたのである。一九九〇年代の初めに、大学院生たちはもはや農民紛争に関心を示さなくなつた。イデオロギーという問題は依然として彼等を魅惑しているように見えたにもかかわらず、一般的には、彼等が求めていたものは、すぐ利用できるものとして供給された研究成果であり、矛盾的であつた（藩史を中心とする地方社会・政治史は出版が継続されたが、若い世代のある一部に軽い関心を引き起こしただけであつた）。イデオロギー批判は先細りになつた。学生たちはいまや、英語で触れられることが殆どなかつた諸主題を読むことを熱望している。それらは徳川時代における女性史（女性の著作、文化生産、ライフサイクル、売春）、マイノリティーの歴史、マージナルグループの歴史、対外関係、医療史などである。

最近の二―三年に、徐々にこれらの要求を満たすような出版物が現れはじめている。

歴史学分野内における理論への信頼性もまた、深刻な問題に直面している。それにはいくつかの理由がある。まず第一には、若干の中心的概念が歴史学の一般潮流のなかに呑み込まれたことである。現在誰でもが使えるようなタームとして、権力・文化資本・想像共同体や脱構築がある。それらは、ミシェル・フーコー、ピエール・ブルデュー、ベネディクト・アンダーソンやジャック・デリダという権威的な名前を使うことなく用いられる。あたかも階級に関して書く時にカール・マルクスに言及する必要がないように。実際、それらの人々の名前に言及することは、何かうさんくさいものに見られるかもしれない。おそらくそれは、学問的センスを欠いていると見なされるからである。

第二に、人文科学に起源を持つ理論的立場の相当数は、歴史家たちの実践的要求と調和し難いということがあげられる。それらは概して云えば、客観性という概念を否定するものであり、テキストが生み出す意味を歴史家ですらも限定することが出来ない、著者の立場の真実性が究極的に考慮されるべき全てである、というような極端な主張である。何人かのポストモダンイズムの支持者は

このような立場を取っている。マクローの解釈（例えば世界史とか、マルクス主義的發展段階論、進歩主義など）またはメタナラティブ、とりわけ国民や国家を枠組みとするそれは、解釈上の力を失ってしまった。そのことは、伝統的な歴史編纂の焦点である特殊性と個別性を安定化させるという結果をもたらした。例えば伝記というような歴史叙述のある定型、そしてトピックス、例えば日常生活、鎖国期間中の「対外関係」などは、高度理論が高潮した七〇代と八〇年代を通じて無価値でとるにたらないと低い評価を受けていたが、それらが重要性を回復したのである。それらに対する大きな要求が今もあり、そうした要求を捉えて供給がはじまったのであるというように、人々は言うであろう。

最後にあげるべきは、理論が非常に複雑多様化したことである。数々の多彩な理論には当惑させられるばかりである。フェミニスト理論、同性愛理論、コロニアル理論、地域研究と異なるトランスナショナル理論、そしてカルチュラル・スタディーズへの幾多のアプローチ、これらの理論を学生たちにどのように紹介するかを決めるのに、皆が困っているのが今日の状況である。書店の多くはいまやこのような著述を別置している。と同時に、マルキシズムと印をつけられていた棚はなくなった。そ

これは、三十年前に歴史家たちの理論への渴望の頼みの綱として使われていたが、今は実質的に消滅したのである。今もなお、理論への入門書（それらは特に人文科学の学生向けであると思うが）とともに、「理論の問題性」あるいは「理論の終焉」（多分、社会科学および歴史家向きである）に関する本が並んでいるのを見出す。そこには理論疲労の症状が現れている。

いまひとつ追加しておかねばならない憂慮すべきことからは、大学出版部の商業化が加速されたことである。それらはいまや基礎的研究報告の出版を、時流に沿ったものかどうかというだけで、昔よりももつと渋るようになった。大学出版部の新規出版を担当する編集者は、どのような原稿が出版物になるかを決定するのに重要な役割を演じている。彼等にとつては予測される販売数が重要な性の全てである。著者が、出版経費に対する売上予想との不足額の負担を求められることは稀ではない（あるケースではそれは一万ドルであった。その本は結局他社によって出版され、二カ国語の翻訳を含み八版を重ねる成功を収める結果となった）。それはまた書物について語る編集者が使う専門用語の変化をもたらしただ。かくして「モノグラフ」（単一分野の研究論文）という言葉は市場価値に従って再定義された。それらのあるもの、すなわち非常に焦点的で

専門的ではあるが、しかし千部以下しか売れない本に対しては、学術ジャンルのものであってもその用語は適用されない。

この学術的・知的情勢の変化は、日本の外での徳川思想史という小さな学問分野にどのような影響を及ぼしたのか。ここでは、合衆国とヨーロッパ（特にフランスとドイツ）の間で区別を立てなければならぬ。合衆国では、何人かの学者が厳密な意味での徳川思想史から外れ（私自身の場合もそうであるが）、あるいはそこへ回帰する意図を明白にしないままに、徳川時代以外の研究へ移っていった。このようにして、かつて水戸学、国学やそれに関係する課題の本を書いた学者たちが、今では昭和初期、戦後期までも、あるいは徳川時代における思想史以外の他の課題を研究しているのを見出す。他にも、新たな学術分野として浮かび上がった十九世紀にシフトしている学者がいる。それには、ドラマチックな裂け目であった明治維新の重要性が極小化しているという理由がある。不平等条約の港における特別な文化、植民地主義、ナシヨナリズム、そして近代女性の地位などは、日本史に関心のある学生を最も引き付ける領域である。私の推測では、徳川思想史という分野の研究は継続されるが、非常にゆっくりとした歩調になるであろうし、そしてモノグラ

フ（両義でのモノグラフ）の形をとるようになり、学派の研究よりも個々の思想家の研究、あるいは原文の英訳に  
なるだろう。

ヨーロッパの学問のありかたはこれと別である。アメリカンファイールドとの二つの主要な相違点がある。一つは、ヨーロッパの学者は、彼等自身の裏庭（繩張り内）で発展した諸理論によって、（豊にするにせよ邪道にみちびかれるにせよ）決して影響されないことである。私がパリで講義したとき、参考にしたピエール・ブルデュー理論への私の言及に対して、フランス人の日本専門家が賛成しなかった時の感觸を思い起こす。これはブルデューが所属した社会科学高等研究院で彼自身がよく使っていた教室において起こったことであった。二つには、徳川思想家を研究するフランスとドイツの両国の学者は、中国思想に関しては大抵のアメリカの同僚たちよりもはるかによく訓練されている。これは、アメリカを凌駕するすばらしい研究を生み出している（過度の経験主義的研究と批判する人があるかもしれないが）。こうして西洋における熊沢蕃山・中江藤樹・安藤昌益また徳川の数学者たちについて、最高の研究がフランスの学者たち（ジャン・フランソワ・スム、ジャック・シヨリ、アニック・ホリウチのそれぞれ）によって著された。荻生徂徠の研究（オリヴィエ・アンサー

ルによる）は高度化と云う点で丸山真男の古典的研究に匹敵するものとなったのも同じことである。ドイツにおけるゲルハルト・ラインズの研究は、仁斎と徂徠の人性論のニュアンスを中国原典に比較しながら詳しく分析している。

一方、徳川思想家の主要な著述がヨーロッパ言語に完全に翻訳されたことは、思想史教育を振興することになった。一つの事例を引き合いに出せば、ジョン・タッカーは伊藤仁斎の『語孟字義』の英訳を出版したが、計画に従って徂徠の『弁名』も出版されれば、日本思想大系の荻生徂徠の巻（『答問書』を加えて）の殆ど全ての翻訳を英語で利用できるようになるだろう。皮肉なことに、学生たちの間での関心は、徳川思想のより多くが英語ですぐ利用できるようになると、減少してしまったのである。

#### 注

- (1) Herman Ooms, *Tokugawa Ideology: Early Constructs, 1570-1680* (Princeton: Princeton University Press, 1985). 『徳川イデオロギー』（ベリカン社、一九九〇年）  
Victor Koschmann, *The Mito Ideology: Discourse, Reform and Insurrection in Late Tokugawa Japan, 1790-1864* (Berkeley: University of California Press, 1987). 『水戸イデオロギー——徳川後期の言説・改革・叛乱』（ベリカン社、

一九九八年)

Tetsuo Najita, *Visions of Virtue in Tokugawa Japan: The Kotohdo Merchant Academy of Osaka* (Chicago: University of Chicago Press, 1987). [『懐徳堂——一八祀日本の「徳」の諸相』(右波書店、一九九二年)]

Harry Harootunian, *Things Seen and Unseen: Discourse and Ideology in Tokugawa Nativism* (Chicago: University of Chicago Press, 1988).

Kate Wildman Nakai, *Shogunal Politics: Arai Hakuseki and Premises of Tokugawa Rule* (Cambridge: Harvard University Press, 1988). [『新井白石の政治戦略——儒学と史論』(東京大学出版会、二〇〇一年)]

William Theodore de Bary and Irene Bloom, eds. *Principle and Practicality: Essay in Neo-Confucianism and Practical Learning* (New York: Columbia University Press, 1979).

(㉓) William Kelly, *Deference and Defiance in Nineteenth Century Japan* (Princeton: Princeton University Press, 1985).

Herbert Bix, *Peasant Protest in Japan, 1590-1884* (New Haven: Yale University Press, 1986).

Stephen Vlastos, *Peasant Protests and Uprisings in Tokugawa Japan* (Berkeley: University of California Press, 1986).

Anne Walthall, *Social Protest and Popular Culture in Eighteenth-Century Japan* (Tucson: University of Arizona

Press, 1986).

(㉔) Jean-Francois Soum, *Nakae Tōju (1608-1648) et Kumazawa Banzan (1619-1691): deux penseurs de l'époque d'Edo* (Paris: Collège de France, Institut des hautes études japonaises, 2000).

Jacques Joly, *Le naturel selon Ando Shoeki: un type de discours sur la nature et la Spontanéité par un maître-confucéen de l'époque Tokugawa* (Paris: Maisonneuve & Larose, 1996).

Annick Horichi, *Les mathématiques japonaises à l'époque d'Edo (1600-1868): une étude des travaux de Seki Takakazu (?-1708) et de Takebe Katahiro (1664-1739)* (Paris: J. Vrin, 1994).

(㉕) Olivier Ansart, *L'empire du rite: La pensée d'Ogyū Sorai, 1666-1728* (Lausanne: Droz, 1998).

(㉖) Gerhard Leinss, *Japanische Anthropologie: Die Nature des Menschen in der konfuzianischen Neoklassik am Anfang des 18. Jahrhunderts* *Jinsai und Sorai Izumi: Quellen, Studien und Materialien zur Kultur Japan* (Vol.2, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 1995).

(㉗) John Allen Tucker, *Itō Jinsai's Gomō jiggi and the Philosophical Definition of Early Modern Japan* (Leiden: Brill, 1998).

(カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授)

(大桑 斉記)